

昭和
四十六年

三七
月二十五日

發行
(每月一回・十五日發行)可

(通第二六二号)

慈光

第二十三卷

第三号

次 目

慈愛と眞実(2)	近角常觀(1)
一道会の記(2)	榎原徳草(5)
人生の羅針盤	高原憲(11)
竹の葉	西川玄苔(17)
「仏かねてしろしめして」	花田正夫(18)

慈愛と真実

(一)

近角常観

五、如來の親心

大乗仏教の書をひもとくときは、真如とか法性とかいう文字を見出すであろう。しかして現代多くの人は、これを哲學的に解釈して、世界の本体とか、宇宙の実在とか考へる弊がある。これは宗教の要点を見失いたる誤れる見解である。

真如というは仏陀自身の本覚の境界であることを忘れてはならぬ、無明（むみょう）の醉の醒めたる境界である。釈尊も寂（じやく）をしてこの境に帰られたのである。又もともと釈尊もこの境界から来られたのである、故に如來へ真如より来生せるものと名づけるのである。

ここにおいて私は仏身觀、如來觀について一言する要がある。そもそも釈尊が御在世の時には、仏とは何ぞやといふ仏身觀はなかったであろう。何となれば現に仏を眼前に拝し奉ることを得たのである。容姿安祥（あんじょう）として和顔愛語をもって弟子にご説法下されたのである。

修して救濟の身を現じたもうのである。これを方便法身（ほうべんほっしん）と名づけたてまつるのである。方便とは決して權倖（かり）の意味ではない。救濟の御姿ということである。

人あるいは法性法身を第一義のように思い易いものであるが、むしろ宗教としては救濟の如來、すなわち方便法身が信仰の対象として第一義であらねばならぬ。親鸞聖人の和讃に曰く、

無明の大夜をあわれみて、法身の光輪きわもなく無碍光仏としめしてぞ、安養界に影現する。

弥陀成仏のこのかたは、いまに十劫をへたまえり法身の光輪きわもなく、世の眞實を見てらすなり。

十方微塵世界の、念佛の衆生をみそなわし

攝取してさてざれば、阿弥陀と名づけたてまつる。

ここに初めて絶対無限の大慈大悲の阿弥陀如來が影現（ようげん）して下されたのである。これは申すまでもなく、歴史以上の如來、永劫の御親であらねばならぬ。しかし、この如來の顯現したまう大趣意なるものが、如來の本願と名づくるのである。ここにおいて十方衆生を救濟したもう絶対無碍の他力本願の大徳音を人生においてはじめて聞くことが出来たのである。

この阿弥陀如來の本願は「十方のあらゆる衆生、いかな

れにましますであろう、仏は何れに去りたまいしや、何れに帰りたまうかという問題が起らねばならぬようになったのである。ここにおいて法身常住の仏を信ぜねばならぬ。永劫変らぬ真如法性（しんによほっしよう）の本覚（ほんかく）の境界に帰りたましいことは疑われぬ。してみれば、もともと釈尊がこの境界より示現したましいことも当然と言わねばならぬ。かくてはじめて人生歴史以上の永劫の仏をみとめねばならぬことになった。この境界を法性法身（ほっしようほっしん）と名づけ奉るのである。

しかるにこの本覚の法性法身なるものは、始なく終なき絶対無限の境界にして、我等凡夫は思議すべからざるものである。しかしかくの如き絶対の境界より、我等迷える凡夫をみそなわす時は、如何にも憐むべきものと思召して、ここに大慈大悲の涙をそそぎ、無明の闇を照し、長夜の夢をさまさんとて、菩薩の身を現じ、本願をおこし、聖行を

る善人も、いかなる悪人も、至心に信樂して我国に生れんと欲して、専ら念佛するものならば、如何なるものも必ず攝取して、助けねばならぬ」という誓である。

これが大慈大悲の親心を宣言されたものである。日本での本願をはじめて弘められたのが法然上人である。勿論それ以前にも念佛を称うることはあつた。然しそれは仏に對してあこがれの念佛であった。親を求める念佛で、恰も石童丸が親を尋ねるような念佛であった。然しそれでは真に親に遇いたてまつることが出来なかつた。しかるに今はじめて開闡（かいせん）された本願というのは、如來の方より衆生に対する親心を宣言されたのである。南無阿彌陀仏というは如來の方より名告りをあげられた招喚の声である。如何なるものも、親よりまのあたり名告られて見れば即刻必ず出会うことがあるのである。法然上人はこれを選択本願（せんじやくほんがん）と名づけられたのである。その意味は如來はいかなる衆生にても救わんとの親心である。もし持戒持律の者を助けんとあるならば、破戒無戒のものは助からぬことになる。智慧高才の者を助くるとあれば、愚痴無智の者は助からぬことになる。如何なる愚人も悪人をも助けんという大慈大悲の親心より、これらの戒律も智慧もえらび捨てて一切善惡の凡夫が称えやすく持

（たも）ちやすい念佛をもって、十方衆生を助けんとい

本願である。

むしろ念佛そのものが親の慈悲のかたまりである。故にこれを選択本願念佛といつてある。ここにおいて阿弥陀如來の選択本願の親心は、如何なる罪惡深重煩惱熾盛の者をも救済せんばやまぬという絶対の慈悲と眞実に外ならぬのである。

六、絶対の眞実

如來の本願、即ち親心なるものは、絶対無限の眞実である。この絶対の眞実に對して見れば、如何なる人といえども自分は不真実極まるものと頭が下がるのである。如何なる孝心なる人も、親に對して孝を尽くしたという自覺はないものである、むしろ他より見て最も孝心なる人ほど、なお親の大恩に對して尽くしようが足らぬ／＼という自覺を持つものである。私は幼時父親から教えられた昔話の譬喻を今に心に銘じて忘れることが出来ぬ。それは姥捨山の話である。不幸な息子が老いたる親を奥山に捨てんと籠に入れて運んだのである。然るに親は何の不満の色もなく、神妙に籠の中から手を出して、路傍の木の枝を折り、草を結んで道するべをしたのである。

息子の思うには、親は捨てられたのちそれをたどって再び家に帰る心持であろうと、いささか侮蔑の色をもって眺めたということである。然るにいよいよ姥捨山に到着して

るなどは、即ち逆叛思想がよくあらわれてゐる。しかるに最後に、意外千万なる絶対眞実なる親心は、いかなる人間の不真実にも打勝つて遂に子を感動せしめたのである。實にこれ信仰徹底の境地である。

弥陀の五劫思惟の願をよくよく案すれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ。

(聖人の常の仰せ)

とあるが、この絶対無限の大慈悲の下に痛酷なる大罪悪感を告白されたのである。

この五劫思惟の願とは、法然上人が宣説せられた選択本願の親心である。阿弥陀仏が一如法界の境界より示現して、一切衆生を救済せんとするに、如何にすべきかを思惟（しゆい）されたのである。しかして無明の闇に迷える我等は、戒律も智慧も、如何なる修行もなすべからざるを洞察（どうさつ）せられたのである。聖観法印の唯信鈔には、

孝養父母をとらんとすれば不孝のものはむまるべからず。読誦大乗をもちいんとすれば文句をしらざるもののはのぞみがたし。布施持戒を因とさせだめんとすれば、慳食（けんどん）破戒のともがらはもれなんとす。忍

親を捨てて帰ろうとする時、親は息子の袖を捕えて最後の遺言するには、いよいよこれが汝と一生のお別れである、随分身体を大切にせよ、だいぶん深い奥山まで来た、定めて帰り路がわかるまいが、来る道すがら心ばかりの道しぐをしておいた、これを辿つて道に迷わぬよう在我家に帰り、どうか跡を嗣いでくれと、これが最後の言であった。

如何なる不孝な息子もこの思いがけない親の言葉に驚かされて、思わず知らずそこに手をついて、如何にも親の眞実なるものが偉大であるのに打ち驚き、感泣して涙のとめどがなかつた。

さて改めて親に願うよう、どうか再びこの籠に乗つていただきたい、これから我家にお伴して一代の間お仕え申したいといふたとの話である。道歌に

奥山に枝折り枝枝るは誰がためぞ

親の身捨ててかえる子のため

この話は親の絶対なる眞実が、如何なる不孝の息子にも徹到底して、感激懺悔せしめたという親心を示したものである。親が子を教訓するときは、子は百も承知しているという態度である。親はやさしきもので、たとい捨てておいても不足も云わぬ、これが親心であると考えるのは不徹底なる氣休め心である。悪しくとも仏は助けて下さるとか、自然であるから致したがないとか、其他現代思想の多くはみなこの不徹底な考え方である。特に侮蔑をもつて親を迎えた

辱精神（にんにくしようじん）を行とせんとすれば、瞋恚懈怠（しんいけたい）のたぐいはすてられぬべし。余の一切の行みなまたかくの如し。これによりて一切の善惡の凡夫、ひとしくうまれ、ともにねがわしめむがために、ただ阿弥陀の三字の名号をとなえんを、往生極樂の別因とせんとて、五劫の間、ふかくこのことを思惟しあわりてまず諸仏にわが名字を称揚（しょうよう）せられんという願をおこしたまえり。

これが五劫思惟の願である。そしてその「五劫思惟の願をよくよく案すれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と述懐された。即ち、親鸞は孝養父母も奉事師長も出来得ざる姥捨山の不孝兒であると懺悔されたのが、實に徹底されたる罪惡觀である。「親鸞は父母孝養のためとて念佛一遍にても申したこといまだ候わづ」というも、畢竟（ひつきよ）う孝養父母の出来ぬ親鸞である。一声の念佛も、親の慈悲のたまものでこそあれ、我より捧ぐる功德善根にあらずと、痛感されたる絶対罪惡の自覺である。

一 道 会 の 記 (二)

榊 原 德 草

私はここで先生の御著「仏と人」の中の『桧舞台に呼びあげられて』を拝読します。『歎異鈔は大体第十一章以下の著者の論証と、第一章以下の聖人の御述懐とから成っているが、中に特定の人が出てくる所がある。その一つは第二章である。もう一つは総結のはじめにある同朋相論の件（くだり）である。それから今一つは第九章と、第十三章に出てくる聖人の唯円房との対話である。

これらの場面を読むのと、他の部分を読むのとでは、読んでゆく気持の上に幾分違いがあるように思われる。他の部分では、言わば単に信仰の声明を聞く——動（やや）もすると聞きながす——にとどまるが、特定の人の出てくる場面を読んでゆくと、何だか一種の芝居でも見るような気がする。

先ず第二章では、特に何某（なんのなにがし）と名は指してないが、『おなじこころざしにしてあゆみを遼遠の洛

ズムにあやつられて、銘々さまぐのしぐさをする。ただ聞く方も話す方も、口を衝いて出る念佛の一つ味わいにとろけ合う。ここに私達は老いたる聖人の未通りたる大慈大悲の發動をあり／＼と窺うことが出来る。

これは打ってかわって同朋争論の場では、大勢法然門下の集まっている席で、私の信心も御師匠の御信心も一つなんだと、独語（ひとりごと）のように言い出す血氣盛りの聖人を見受ける。すると、見る／＼四圍の空気が険悪になつて傍にいた勢観房、念佛房などが真先に、これは怪しからん、何たる大それた言を聞くものかな、とばかり聖人に詰め寄つて、そんなことがあって堪るものか、と食つてかかる。聖人はこれは意外と言つた面持で、いや私の言つたことを誤解して下さつては困る。私は何も智慧才覚の優れた点で御師匠と一つだと言つたのではない、唯おたすけの種になる信心には変りがないと言つただけです。と弁明するが、相手はいつかな承知しない。それが怪しからんのだ、実際に突拍子もない僭越の沙汰だと息巻いて、眼をむき、臂（ひじ）を張り、衣の袖をたくしあげて、聖人に取消しを迫るが、聖人も問題が問題、自分の信仰上の確信を吐露したのであるから、何と云われても頑として主張を柱（ま）げようとしている。居合わせ人々の中には、はて面白い議論がはじまつたものだ、とじつと様子をうかがつてゐる

陽にはげまし、信を一つにして心を当来（とうらい）の報土にかけしともがらの幾人かが、聖人の御居間に詰めている。もう一人々々聖人へのていねいな御挨拶をすました後であるが、聖人を見上げまつる一つ／＼の眼には涙が滲んでいる。

身に沁みわたる懷かしさと忝（かたじけ）なさの所為（せい）であろう。

やがて聖人は開口一番『各々十余ヶ国のかかいをこえて……』と説きおこされる。片言隻語（へんげんせきご）も聞きもらすまいと固睡（かたず）をのみながら、全身を耳にしている人々は、聖人の話の進むにつれて、身を伏せたり、うなずいたり、かと思うと首をかしげたり、のけぞつたり、石のよう固くなつたかと思うと、ほつとした体（てい）で暢んびりする。さては目をこするもの、顔をなでるもの、腕をこまねくもの、躍りあがるもの、聖人の胸に湧きあがる沈痛な感じが、声に出て抑揚となる、そのり

人もないではないが、多數は喧々（けん／＼ごう／＼）、口角泡を飛ばして、聖人を非難してやまない。舞台が一転する。ここは法然上人の御居間である。善信房を被告格として、勢観房をはじめ、原告側の連中がずらり居並ぶ中から、一人が恐る恐るいざり出て、訴えの趣を申し上げると、また他の一人が進み出て、云い足らないところを補うといつた風に、一伍一什（いちぶしじゅう）を御師匠のお聴きに達する。やおら上人は一同に向つて、ノ源空が信心も如來よりたまわりたる信心なり善信房の信心も……』と和顏愛語の中に深い感慨をこめて仰しゃる。一同は平身低頭する。中には感極まつて啜り泣くものさえある。その時の善信房、聖人の氣持はどうであつたろう？試みに身を聖人の中に入れて推量して御覽なさい！

こうして私達は如來廻向の信心相互の共鳴を、事実の上に拝見さして貰えるのである。

それから第十三章には、聖人と唯円房との対話の形で千人殺しの問答が出ている。これは聖人から唯円房に、わざと、云わばソクラテス法的ともいふべき問い合わせられて、動きのとれない所を押えて、『さるべき業縁』の思うようにならないことを諭されたので、身辺の事実を捉え来て、乱麻のいとをさばく、その御手際の鮮かさは、一読三歎の外はないが、ここでは唯円房が徹頭徹尾愛身なので、

それから受ける印象は、他の諸章の聖人の獨白的御自督（どくはくてきごじとく）を読むのと、さして変りを覚えない。

ところで最後に第九章である。これはまた何たる大きなかつてゐる言葉も小さすぎる——無窮無邊、絶対の力である！のつけから心頭をひっ摑（つか）まれて、問題の渦の中にざる／＼と捲きこまれてゆく氣持がする。というのは、ここでは唯円房が進んでお尋ねする、しかもその内容がである、その覺悟がである。その内容とは、信心の行者が一般に通ずるおもわくであり、その覺悟とは、一期の大事故の一点にかかる、一か八かの思い切りである。

「念仏もうしうらえども踊躍歡喜の心おろそかにそぞろうこと、またいそぎ淨土へまいりたき心のそうらわぬは、いかにとそうろうべきことにてそうちらん／＼よくもよくも思い切って打明けたものである。信仰を単に言葉の上のやりとり、積木細工のように、心の組立一つで行くと考えてる人ならば、平気でこんな問を口にもしようが、信仰をおのずからなる心のきまり、恰も泥沼の中に散った蓮の実が、春の光に芽生え、茎と伸び、葉に出で、蕾と成って、やがて朝日の光を浴びて、蓮華の花と開くように、遠く弘誓（ぐせい）の強縁、宿善の開發による自然生成と取つてある人にして見ると、こう尋ねるのは、命懸けである。若しいけないと云われたら百年目、唯円房にして見る

と、今の自分の信的状態は、凡そ自分に与えられ得べき限りのものとしか思えない。それがいけてもいけなくとも、自分の性分ではもうこれより外しかたがない。だからこれではいけないとなると、よし聖人の膝下にて、直々のお指図を仰ぐ仕合せはあるにしても、九分九厘まで往生の望みを絶たなければならぬ。身に不治の病が出たのではなくかと、心ひそかにおそれでいる人が、名医の診察を請うようなもので、診て貰いたくもあり、診て貰うのがこわくもある。裁定一つが生死の擧目だからである。かねての心掛かりを、今口に出した唯円房の眉宇の間には、決死の色が漂つっていたに違いない。

ここで一つ私達自身の態度を省みておく必要がある。私達が芝居を見る時は、筋と台詞（せりふ）と仕種（しぐさ）に応じて、泣いたり笑つたり、怒つたり喜んだりするが、それは要するに他人事の傍観者としてである。だから芝居がはねるときろりとして、ただ幾分の思出が残るくらいが闇の山である。

だがこの九章の場合、苟も自ら信者を以て任ずる人、又は兎にも角にも念佛の出る人、或は又ぐと範囲を拡めて、信仰を求める人と云つてもいい。こうした人々は單なる傍観者として観覽席にすましてはいられない。よし身は観覽席にあっても、心は唯円房に乗り移ってしまう。何故ならば、こうした人々の心の奥に蟠（わだかま）つてゐる

我ながら氣味わるい秘密を、唯円房が代弁者となつて、今聖人に訴えていてくれるからである。だから意氣込みに於いても、せめて唯円房のそれに似たものがないでは嘘だ。だのに實際その半分にも行かないはどうしたものか？私は今その理由（いわれ）をうちつけに云う、それは唯円房の影にかくれるからだと。

さて愈々聖人のお答え下さる段になるのであるが、ここでまた先ず第一に驚かされるのが、聖人の態度である。

「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじころにありけり／＼何たる同應相入（どうおうそうにゅう）の態度だろう。唯円房と聖人とは、全く同じ座についている。その間、毫（すこ）しも上下の隔てがない。」親鸞は弟子一人

唯円房と同座していられる聖人は、唯円房を代表として、その影にかくれてゐる私達とも同座していられるのである。本来ならば勿体なやと恐縮しなければならないところだが、自分はあくまで影にかくれてゐるつもりなんだから済ましたもんである。

以下ざつと挙読すると「よく／＼案じみれば、天におどり地におどるほどに、よろこぶべきことをよろこばぬにて、いよく／＼往生は一定とおもいたまうべきなり／＼と思ひがけない聖人の断案に、叱られる覺悟を裏切つて御褒めの言葉で撫でられたあんぱい。心の張りは緩んだものの、何が何だかわからず、呆然とする唯円房。

聖人は更に言葉を続けて「よろこぶべき心をおさえてよろこばせざるは煩惱の所為なり／＼と、不審の萌す種を取り上げて「しかるに仏かねてしめして、煩惱具足の凡夫とおおせられたことなれば」と、飽くまで煩惱に相応したまう本願の動機に照らし、終に「他力の悲願はかくのときのわれらがためなりけり／＼と、胸に湧く実感そのままを打出して、願より生ずる信そのものの味わいを明らかにされた。

此の時この場の唯円房の態度や如何、私はそれを説明しようとはしない。皆さんの御推察に任せよう。その代り一つ皆さんにお尋ねしよう。皆さん自らの態度や如何と。

私は今ここで九章の解説を試みる、即ちそのありがた味を絮説（じよせつ）するのが目的でない。私の目指すところは、皆さんが今聖人の最後の言葉を聞いて、どう感じられるかという点に、皆さん注意を喚起したいのである。

「他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけり」ときかれて、何と思われるか、そこである。

皆さんはどうか知らないが、私はここではつと氣をつけたのです。途端に自分の居場所ががらりと一変するのを感じます。それは外でもない、聖人の「かくのごときのわれらがためなりけり」とあるお言葉に釣り上げられるのです。何のことはない、針の餌をなめている釣の後で、うろうろしていただぼはぜが、釣の釣り上げられる拍子に、横腹に針をひっかけられたようなもの。今までとても、他の場所とは違って、影にかくれていながらも、ただ他人事とは思わないで、自分も一緒に渦の中を泳いでいる気持だったが、兎に角影にひそんでいるだけ、半分は見物気分です。

頼母（たのも）しさが、口に出るのが念仏である。だからこのお言葉は、言わば信心への入口であり、また念仏の出口である。

最後に一言附け加えて置く。歎異鈔を十八の門を以て正しい信仰界を囲繞した機構と見れば、固よりどの門からでも中へはいれるのであるが、就中（なかんずく）、真正面に大きく八文字に開かれた往生極樂の正門とも謂つべきは、第二章「親鸞におきてはただ念佛して弥陀にたすけられまいらすべしとよき人のおおせこうむりて信ずるほかに別の仔細なきなり」である。現に私などもこの門をくぐらせていただいた。第二章は正門、表門とすれば、第九章は疑いもなく裏門に該当する。第二章からはいりにくい人は、試みに裏門の方に廻って見るが好い。ここほど如来のお心が如何に私達に向って働かれてるか、その水も漏らさぬ周到さの徹底的に窺われる文献はまたとない。

第二章からはいったつもりでも、月日が経つて従つて入信のほどぼりがさめて来て、自分があやしくおもわれ出した時、不図裏門を出かかると「よろこばぬにて」で、根こそぎ不安を取り去られて、搖がぬ頼母しさの坐（すわ

た私が、今はどうでも前に出て、正体を露（あらわ）さずにはいられなくなつたのです。「あゝこれ／＼、その唯円房の後に控えていられる方々、まあ／＼ここへ出ていらっしゃい。我等がためなんですよ。甲某さん、乙某さん、あなたがた一人一人のためなんですよ」と聖人に呼びかけられ、話しかけられるのである。観覧席から桧舞台に呼びあげられるのである。

何たる驚くべき転化であろう！自分は今唯円房と並んで聖人の眼の前に坐つてるのである。直々聖人の聲咳（けいがい）に接するのである。面授口訣（めんじゅくげつ）を受けるのである。自分は今、聖人の相手役を仰付けられるのである。そして本願招喚の勅命を聞きつつあるのである。

私はここで本題の話を打切る。以上は九章の前半について述べたのだが、後半も全く同じ趣である。

「ああ！」かくのごときわれらがためなりけり「凡そ念佛する人の、若しくは「念佛もうさんとおもいたつ心のおかる」人の、意識的にせよ、無意識的にせよ、この感じを通らない人があるうか。そしてその感じに釀（かも）された

り）がつく。

これを要するに第九章は未信の人を信界に引き入れる役にもたてば、既信の人のふら／＼と結界の外へ逸するのを防ぐ役にもたつのである。」

「桧舞台に呼びあげられて」、この講演は、京都、大阪、岡崎などで度々先生のお口から直接拝聴したものです。会場の前や演壇のうしろに出すこの講題もよく書いたものです。又この御講演の時は一番前によく保木君と二人で坐つて貪るように先生のお顔をみつめ乍ら全身を耳にさせられて聴いたものです。そうした時「かくの如きのわれらがためなりけり」の所で「さあ唯円房の影に隠れている保木さん榎原さん、かくのごときのわれらがためなんですよ」と先生から呼びかけられたものです。そうするとこのだぼはぜ二人は直々聖人のお声に接する思いで有難さにお

念仏が流れることであります。

三十三回忌の今日、先生の「親鸞におきてはただ念佛して」の御言葉が、常に私の胸に生きつづけて光り輝いて照らして居て下さることを感じるのであります。

人 生 の 羅 针 盤

高 原 憲

(註) 高原先生の一周年忌を前に御令息の高原誠様から、病死若き日の思い出やよし白線の帽をいただき我も歌いし先生の高著『水の味』を頂きました。先生は第一高等學校時代に、近角常觀先生の求道學舎に入られて、念佛法の縁を得られ、以来念佛をいのちとして、医道に尽瘁された、稀有な人であります。その御本から「羅針盤」の一節を頂き、この春、入学、或は卒業せられる方々にお送り申します。

編者記

K君おめでとう。君が高等学校(旧制)の難関を見事パスしたことを聞き、君の得意の様を思うと共に、僕も三十年前、かくありし若き日の思い出を、つくづく偲ぶのである。高等学校三年間の生活は、学生生活を通じて一番青春にみちた花のようなものであり、人生生活のうちで最も思い出の深い春の世界である。

「この船は主に天津通いです。一ヶ月もあれば一航海出来ますよ」

「こんな小さな船でな！大丈夫ですか？」

「羅針盤がありませ。」

「こんな船にも？」

「この羅針盤一つがたよりですよ。これ一つあればな」

「それでも、シケに遭つたら？」

「そこです。シケにはなおさらこれが有難いです。たの

みになるのはこれ一つ。」

「そうかな。婆婆の海も羅針盤なしには危いです」

「婆婆の海に？」

「二つありますよ」

「手製のはこわれるからな。婆婆航海に使うのは絶対に狂いがこない」

「どうして？」

「仏様から下さりものじゃから……」

「……」

先夜のことである。美津野泉青は船へ往診した。二三百トントばかりの発動船が海岸に横づけされていた。船長の息子が海へおちて発熱したというのである。狭い船長室で診察をすました泉青は、直ちに腰を上げようともせず、船長へ話しかけた。

「船長さん、この船でどこまで行けますか。」

人生航海の優秀船たらんとして、皆、よりよき教育をうけんとしている。君が最高学府をねらっているのもそうで

人生は短い。しっかり腹をすえて勉強し給え。優秀船たる努力を忘れてはならぬ。だが、船の出来方は結局相対価値でしかない。羅針盤がなかつたら、どんな優秀船でも、そのまま、あてもなき漂流船となり、やがては難破の運命が待つてはいるばかりである。この羅針盤こそ絶対価値であ

○

る。

毎年、沢山の優秀船が賑々しく船出している。羅針盤が忘れられているようである。やがては漂流船になるのかと思うと、おそろしいことである。

「狂いのない羅針盤をいただく。」これが人生航海にあたつての第一のものであり、最後のものである。
最高学府においてすら、この絶対価値の羅針盤が与えられないのはなぜであろうか。人間の手によって作られぬからである。

人生の羅針盤とは、仏様から廻施せらるる名号である。

南無阿弥陀仏のお六字である。



この羅針盤を頂くにはどうすればよいか？それは聞法一路である。はかなき夢を追うている若い人達には、この聞法の味はなかなか出ないものである。しかし聞法の外にこの絶対価値をいただく道なきことを忘れないことである。ただ素直に聞くがよい、聞くことによって一切が恵まれる。若い学生達がよくたわむれに、酒や煙草をたしなみはじめることがある。いろいろつらい思いをして、やがて醉うてくる。「酒なくて何のこの世が……」と来る。

ませぬ。医者も、注射や薬やと防禦戦を布きます。横から観戦していた本来、色即是空論者は「薬なるものは玩具に過ぎない。病は本来空じや」と宣伝をはじめます。進退きわまるのはこの妄想型です。この戦法にはどちらにも無理があります。物には力に限りがあることを忘れているからです。知識が深められるにつれて、力の限界が見えてきます。

敵艦が五千メートルの沖へ現されました。こちらの大砲はあいにく三千メートルの着弾距離の力しかない。甲は、とともにかくにも、一斉射撃を始めるのです。弾丸は一発も命中しません。力尽きた頃に、敵にポカンとやられます。力の限界を知らないでいると、病敵に対してこの戦法で向います。乙の戦術家は空手でやろうというのです。大砲を玩具としか思いません。科学の力を無視した迷いからでます。医術は厳肅です。取り扱う者の手が穢れていて

「仏法は若きときたしなめと候」と蓮如上人も申されて

いる。若きときあやまつた法を聞きそめたら、それこそ大事である。

智識はむざばれ、人生は短い。

魂はみがけ、聞くより外に道はないぞ。

御飯はいただけ、御恩をいただくのだ。

(附) 診療簿余白

病人に三つの型があります。

第一は凡人型です、病氣に相応しただけ病人になる人です。

第二は非凡型です。死病を持ちながらも、御本人は少しも病人ではないのです。

第三は妄想型です。病氣はないのに、御本人は大病人になります。まじめにいる人です。この型が世間には想像以上に多く、またはばをきかせていました。インチキ宗教の正客です。

一度病魔襲来、さあ大変です。薬でないと夜も日も明け

は人を傷つけることになります。ここに反省が要ります。知識を磨きあげるのも人の手であり、汚すの人の手でしかありません。力の限界が見えて来ますと、知慧を越えた世界を求めます。水の味もここにあります。

ある村の貧しい老同行が臨終に近づきました。村の長者の奥さんが最後を見舞われました。

「奥さん、最後のお願いです。水を一杯！」

老人は一杯の水をおしゃいただき、百味の飲食(おんじき)でもあるかのように味わいました。

「この水の味がああ！」と讃嘆しながら、念佛往生をとげました。『万有净水』と哲人は申します、水は万人へ恵まれたものです。水なしには一日も生の無いものであります。一生この「水の味」が悟れぬのです。ただ地上一切の物が否定せられた刹那に、はじめてこの水がいただからましょ。

「この水の味がああ！」と讃嘆して往生をとげた、この貧しい同行のお念佛が、そのまま水の味であります。はずかしや味なき水に味つけし

わがはからいのあわれかいなき

転 悪 成 善

医学部に入った彼は、母と同伴で久しう振りに美津野泉青を訪れたのである。

「その後、脚の調子はどうです？」

「自由に跳び歩いてる人を見るとなさけなくなります」

徳さんは温順な少年であった。その父母にとては、かけかえのないひとり息子であった。小学校四年生の頃、突然股にはげしい痛みを訴えた。あらゆる手当を加えたが何の甲斐もない。

はるばる専門医を訪れて、股関節結核の診断を受け、入院加療することとなつた。一時は容体陥悪になり、あわや脚一本切断の余儀ない羽目にまでたちいたつたが、母親の切なる願から、しばし経過をみることになった。母親は一切をなげすて、愛児の脚一本を看守すること四年、その間、帶をといてやすんだことは稀であったほどである。

療養の甲斐あつて、関節結核は、関節強直を残して治癒したのである。しかし治った姿は悲しや生れもつかぬ跛（びっこ）である。頭がよつたので、病床の中に小学校の学習課程を修得し、さらに進んで中学二年の学業までも終えていた。

不自由な足をひきずつて上京した彼は、難なく中学校の編入試験をうけて合格した。やがて中学を卒業すると、直ちに熊本の五高に入学した。優秀な成績で五高から大学のがそのまま、それを苦にしない、治った姿である」と、話し合つた。

徳さんの大学卒業を待たずして、お母さんは亡くなられた。徳さんは研究を続けながら、足どり軽く歩いている。お母さんは、まさしく徳さんの片脚の中に、生きて働いていられるようである。彼の不自由な一步一步が、やがてまた淨土への一步一歩であれかしと、美津野泉青は念じているのである。

（註）以上も高原先生著の『水の味』から転載させていただきました。御希望の方に、本書を御紹介いたします。

水 の 味

高 原 憲 著

発行所、長崎市古川町七番九号、高原病院内
聞思会。

定 価 四〇〇円、送料、八十五円也。

著者略歴

明治二十五年、長崎市に生る。

大正二年、第一高等学校卒業、この間近角師の求道学舎に止宿、聞法。

水の味、味なき味を知りえてぞ無碍の天地に通ずる心

高原先生聞書 秋月辰一郎

結核の病人に接する医師は、科学と同時に自ら宗教的であるねばならぬ。

明日は生命はないのだ。今日限りのいのちだ。ただ羅針盤さえしつかりして居れば彼岸に到達する。

道心中衣食ありといふ伝教のその足跡をわれもたどらん

何もかも我一人のためなりき今日一日のいのちどうとわん

ゆれながら磁針の北をさすがごと我が足許は西へむか

竹の葉

西川立苔

身体以上の身体で
私のイノチの中に
生きて居られる

母は死んだ

私は自分の手をさすり

はじめて氣付いた

この身体は両親の遺されたもので

あつたのだ

○ 母は死んだ
しかし
今や両親は
仏のイノチとして
私を照らして下さる

母は死んだ

しかし

父も死んだ

母も死んだ

花田正夫

「刀はどんなによく切れても、刀自身を切ることが出来ぬし、鏡はどんなに立派でも鏡自身を写すことは出来ない。そのように人間は如何なる智慧者といえども、身辺三尺は暗闇である」

と、説かれている。

後世の聖者は「おのが能力を思量せよ」と、真に道を求める前に、懇切な警告をせられている。たとえば東京に行くにも、自分の現在の居る場所がわからないと、行くべき方向も、また方法も決定出来ないで、行きつもどりつ右往左往しながら空しく終らねばならぬ。

「汝自身を知れ!」とは紀元前六世紀の頃からソクラテスが投げかけた大きな謎である。人々はこのことをめぐつて夫々に思案したことであろう。或人は、自分のことは自分が一番よくわかっているという。成程、人それぞれに重荷を持っていて相手の身になるゆとりのないこともあるし、また人間の持つ経験には限界があつて、相手の心を知ることの出来ぬ場合が多い。そこで人が自分を理解していく、また淋しさから、自分のことは自分が一番よく知れないという愚痴も出るものである。かくて加えて、身びいきなところが、自分のことを美化し、うぬぼれのところが自分を誇大視してひとりよがりになる。デコボコの多い、煩惱に疊った心でどんなに反省しても、正しい自分は見えようもなく、また身辺の人々にしたところが不完全な心の鏡しか持ち合せがないのだから、そこを見抜いて正しい注告をして貰うことも不可能である。

しかし、ソクラテスより百年前に誕生された釈尊は、

鏡に写る自分

「最初のボタンを間違うと、最後まで間違う」と西哲は人生の出発点を正しくすることを諦めているが、さて一切の出発点の根本である自分自身を正しく知ることは難中の難事である。東洋では「本立てば末おのずから通ず」とい

う。それなのに、よい学校へ入れ、よい仕事を見出せ、立派な家庭を作れということばかりに心をくばって、いわば末梢のことには心身をすりへらして、やがてそのむなしさに絶望するが、人生をやり直すわけにいかない、たった一度の人生である。

この大切な自己を知るには、曇りのない、デュボコのない完全な明鏡にうつすことが一番たしかで、早道である。

それにつけて世の中には沢山の教があつて、どの鏡にきめるかは、人々の自由であるが、私自身は、仏陀の教えの鏡を有縁のよき人から教えられた。それというのも、自分自身を知る力がないように、沢山の教の中から真実な鏡を見出すことは私は不可能であったから。

さて、私は仏典のうちまず歎異鈔を勧められた。そこに「仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたることとなれば……」

とある。次に、親鸞聖人の一念多念文意に、「凡夫というは、無明煩惱われらが身にみちみちて、欲もおおく、いかりはらだち、そねみねたむこころ、おおく、ひまなくして、臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえず」と、あらゆる煩惱をのこらず身に持つた凡夫の有様をね

來るのである。だから不動地の菩薩以上の仏陀において、あきらかに凡夫の姿が手のひらを見るように知り尽くされるのである。こうした仏陀の仰せに、凡夫の二十事として、

一、我が身中は空にして煩惱に濁りきっている。
二、善根は何一つ無い身である。

三、我が生死の苦は未だすこしも調えられていない。

四、深い坑（あな）におちこんでいて到る処に畏れがみちみちている。

五、眞実の智慧がないからどうして見ても仮性を見ることが出来ない。

六、心は常に乱れ、さわいでやむ時もなく、妄念に閉ざされていて、真如の月を仰ぐ由もない。

七、四苦八苦へ生老病死の苦、愛別離苦、怨憎会苦（おんぞうえく）、求不可得苦（ぐふかとく）、五蘊盛苦（ごうんじょうく）／みちみちていて苦に沈み、無常と苦と空で、頼むべきものは何一つとしてない。

八、愚痴に覆われ、瞋恚に狂い、貪欲に迷うて、健康にほこり、たまゆらの快樂におぼれ、要領よく世渡りをして得々とし、又は身体に故障がありなどして仏の在世の時にさえ道を求め、それを修し、眞の法楽

んごろにとかれている。しかも親鸞聖人御自身に「煩惱具足のわれらは、いずれの行にても、生死をはなることあるべからざるを云々」と、歎異鈔三章に、わが身がそれであるから、生死流転の苦をはなることは及びもつかぬ、地獄が一定の身であると仰言つてゐる。

涅槃經の「凡夫二十事」

仏敵ダイバタッタにそそのかされて、父王を獄死せしめ、母后を幽閉し、仏弟子をののしつた五逆の阿闍世王が、やがて大懺悔の身となり、仏弟子ギバ大臣に導かれて仏前に詣で、おへだてなき仏心のまことに浴して、ようやく心ひらけ、仏語に耳をかたむけた時、

「大王よ、今まさに汝のために正法の要（かなめ）を説くべし。汝まさに心を一つにしてあきらかに聽け。凡夫は常に心にかけて身に二十事あることを観ぜよ」

と仰言つて、次のことをあげられている。思うに、山中に居る時はかえつて山全体が見えず、山を出て、振返る時山の全貌が知れる。又夢みている時は夢が夢と氣付かぬが夢がきめて、夢だったとわかつて来るよう、仏道をおさめて、菩薩の第八の位、不動地の境涯に達して、始めて凡夫地を脱し、われも一人の凡夫に過ぎないと自覺が出

九、つねに怨みを持つ者につきまとわれている。

十、種々の迷いから解脱する一法をも持たぬ。

十一、三惡道の因ばかり造つて、そこから逃れ出ることが出来ない。

十二、悪という悪、邪見という邪見はすべて身にそなえていてありますところがない。

十三、常に五逆の罪を造つておりながら、どうして救われ得るかの道も知らない。

十四、生れかわり死にかわり、迷いに迷うて尽未来際（じんみらいさい）につきることがない。

十五、すこしの修行もやらないから得るべき果報もない十六、自分が作った業は自分が受けるので、代ってくれる人はない。

十七、染の果のみ求めているが、染の因を造ろうとはしない。

十八、如何なる業も必ずその実を結んでくる。

十九、煩惱に眼さえられて、闇から闇へと生死流転を続

ける。

二十、無智の凡夫の常として、過ぎし日も、今日も、来（こ）む日も、常に放逸に流れて、人生は空しく去つて行く。

と、仏陀の御目にうつった凡夫の苦相を順次あげられ、

更に声をはげまされて、

「大王よ、先ず凡夫はこの二十事を我が姿であると知らねばならぬ。このことをあきらかに観せられると、生死の苦の逃れ難く、断ち難きを知り、しかもその原因は他にあるのでなく全く自業自得であると知れ、漸次に乱れまどう心も定まつて、眞実の智慧も生じ、乱行もおさまりはじめる。このことをよく観じなければ、心は何時までも浮つ調子になり、どんな悪をものこらす造るであろう。……」

と、懇々と諒められた。阿闍世王はこれをお聞きして「世尊よ、私は昔からこの凡夫の姿を聞いたことも、観じたこともありませんでした。そのため多くの罪を造つてしまりました。三惡道（地獄・餓鬼・畜生）の外行き場のない者であります。もっと早くこのことをお聞きしておりましたら、無罪の父を殺すということもしなかつたと思いますが……。もうあの祭で、すでに大逆を犯してしまいました。無間地獄におちるのが必定であります。」

と、仏前に泣血懺悔しておる。噫しかしこれは阿闍世王

ひとりのことではなくて、一言一句、私共自身の凡夫の姿を照らされるのである。

また仏の放たれる大善の徳光は、独善の空しさを知らし、悪業も本願をさまたぐる力なく、独善の水も逆惡の雪も、とかして一味の功德の水と転じて下さる。

更に仏の放たれる大慈大悲の無碍光は、身にもつ罪業からのがれられぬあらゆる碍り、衆禍を波転して下され、人間に生れたことがよろこばれる幸恵を施して下さるのである。

讃阿弥陀仏和讃に

智慧の光明はかりなし有量の諸相ことごとく
光暁かむらぬものはなし真実明に帰命せよ。

（註）光暁、ひかりをうけてあけばのとなる。

光雲無碍如虚空一切の有碍にさわりなし
光沢がぶらぬものぞなき難思議を帰命せよ

（註）光雲の如くにして無碍なるさま。

光沢、ひかりを身にうけて智慧の出てくる

なり。心のつやつやとするなり。

慈光はるかにからしめひかりのいたるところには法喜をうとそべたまう大安慰を帰命せよ

（註）大安慰、大なるやすらぎと慰めを頂ける真

実のよるべの方。生のよるべ、死の帰するところとなつて下さる方。

以上は、弥陀仏の大悲の本願が成就して、常時不斷に照

竜樹菩薩の智度論には

「哀れなるかな衆生、常に五欲のために悩まされ、これを求めてやます。この五欲は、これを得れば、うたた劇しきこと火の疥癬（かいせん）をやくが如し五欲の益なきこと狗（いぬ）の炬（ひ）をかむが如し五欲の争いを増すこと鳥の肉を競うが如し五欲の人を焼くこと逆風に炬をとるが如し五欲の久しからざること假借の須臾（しゅゆ）なるがごとし。世人、愚惑にして五欲に貪着（とんじやく）し、死にいたるも捨てず、これがため後世に無量の苦を受く」と、切々たる悲心をもつて呼びかけて、聞法と求道を促されている。

如 来 の 作 願

我等衆生を、煩惱具足の凡夫の故に、生死のまよいからはなれ得ない身と、仏はかねてからしろしめされて、そこに、こちらから願いもせず、求めることさえも知らぬのに、やむにやまれぬ大悲心をもつて、苦惱はてしない衆生救濟の本願を建立され、成就されている。

かくて、仏の放たれる大智慧の光明に、智者のもつ慢心と愚者の持つ卑屈の毒を滅して無明の闇を破つて下さる。

らして下さる徳光であり、老少善惡のひとえらびたまわぬのであるが、そのことを知らぬじまいにすごす人の多いのは、まことにいたましい限りである。法然上人のお歌に、

月影のいたらぬ里はなけれども
ながむる人のこころにぞすむ

さえられぬ光もあるをおしなべて
へだてがおなるあさがすみかな

と、本願念佛のひかりを共に／＼うけたいものと願われている。

本 願 の 徹 到

凡夫二十事にも、智度論にも諒められる通り、煩惱具足の凡夫こそ我身で、智目、行足を欠く、全く浮ぶ瀬の絶えて無い身である。

法華經の譬喻にも「長者窮兒」では、惑い迷うて家も親も忘れてたさすらしい人を、長者の親があらゆる慈悲方便をこらして、親子の名告りをあげ「火宅三車」の譬では、メラメラと燃える古家の身にせまる危険も知らず、かえつて遊びたわむれて、早く出よと叫ぶ親の声も耳に入らない痴人を救い出すために、牛・鹿・羊の三車を作られての勧誘「衣裏宝珠（えりほうじゅ）」では、親切な友人から恵まれた宝珠も知らずにさまよう身が、幸によき人にめぐり合つて救われる有様を知らされる。

以上は皆、智目、行足なき身をどこどこまでもお見捨てのない仏のまことのひとりばたらきを知らされる。

昔から、英雄にして、英雄を知り、駿馬は伯樂（はくらく）を待つて見出されると。大智、大善、大慈の仏心が、愚惡の凡夫の身に見出されようはずはない。聖人は教行信証の信卷のはじめに

「然るに常没（じょうもつ）の凡愚・流転の群生、無上妙果の成じ難きにはあらず、真実の信楽、実にうること難し。何を以ての故に、いまし如來の加威力（かいりき）に由るが故に、博く大悲廣慧（こうえ）の力に因るが故なり。たまたま淨信を獲（え）ば、是の心顛倒せず、是の心虛偽ならず。ここをもつて極悪深重の衆生、大慶喜心を得、もろもろの聖尊の重愛を獲るなり」

とある。仏力によれば獅子が子鹿を仆すように凡夫を成仏せしめることは容易であるが、その仏力を信ずることが至難である。それはただ仏様から加えて下さる威力と、大悲心から出る智慧の力によってはじめて真実の信心がおこされるので、我々の智慧や才覚では不可能であると教えられている。

蓮如上人の御一代聞書には

「いたりて堅きは石なり、いたりてやわらかなるは水なり、水よく石を穿（うが）つ、心源もし徹しなは菩提の

三經義疏の倫理学的研究

白井成允著

発行所、京都市下京区堀川通花屋町、百華苑。
定価、四〇〇〇円。振替、京都二五七八八番。

白井先生序文抄

若かりし日、人は何のために生きるかの間に迷いこんで倫理学の研究に志し、幸に仏教に救われて己れの歩む道を確立し得て後、中年にして、先師の教に導かれて、聖徳太子の鴻恩を思うに至り、太子の御撰と伝えられてきた三經（勝鬘經・維摩經・法華經）の義疏をうかがうこと多年を経て今に至った。……たまたま私が広島を去つて京都に移るや幾もなく、信友、故谷内正順ならびに佐々木円梁の両法兄から、私が学問の辿りに於いて甚だ懈怠であることを厳しく叱られ、精進して一書を稿するよう励まされた。その友情に動かされてつつ「三經義疏の倫理学的管窓」を稿して至情に酬い得たのはそれから三年ばかりたつてからであった。首を廻らせばもう十年余りも過ぎて了つた。

……思えば私が朝鮮に在つて義疏を窺い始めた頃には太子の教学は学界において殆んど顧みられなかつた。……然るにこの数年来、太子研究の氣運が漸く盛んになり、正し

覚道（かくどう）何事か成せざらんといえる古きことばかり。いかに不信なりとも聴聞を心に入れ申さば、御慈悲にて候うあいだ信を獲べきなり。ただ仏法は聴聞に極まることなり。」

とある。我執我慢でかためた堅い石同様の身に、絶え間なく注がれるやわらかな大悲の心が徹して下さるのである。維摩經に香積（仏國）のことが出ていて。そこでは、仏陀がよいかおりのする御香を焚かれると、その仏國の人々は自然にその徳香に感化されてしまうが、釈尊の出られたこの娑婆世界には、強剛難化（きょうごうなんけ）の者ばかりで、仏陀は軟語、粗語を使われて調伏せしめねばならぬ、とある。我々が順境の時は浮調子に流れて真実の法を忘れ、むしろ逆境にあってめざめることの多いことからも、維摩居士の警告が身にしみる。

噫、仏心に映る、煩惱熾盛、罪業深重の凡夫のわれら、その故にこそ、大悲うむことなく、たゆむことなく、そぞろにそぞれるありがたき！聖人の常の仰せ

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案すれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」

を繰り返しながらこの稿を終る。

四十六年二月十五日、仏涅槃会の日。

く一大歩を展べんとする勢にある。實に喜ぶべきことである……。

さてこの書を公刊するのを躊躇していた際、一二三の善友が来て、既に百華苑主とも謀り、數多の師友の方々をも誘い合わせたと云つて、もう太子の千三百五十回の御忌が来るから、これに供えよとの事である。おもえば御忌はすでに迫っている。そして私の今生もはや風前の灯火に似てゐる。愚鈍にして懈怠なる私にはこれ以外にお供えすべきものを持たない。さらば今生の記念として御忌の御宝前にこの資しき管窓を供えしめよ。私は今ここにこれを能くせしめて下された十方の諸善師友に深く感謝してまつる。云々。昭和四十五年九月二十八日。

△白井先生略歴△

明治二十一年、岩手県生。同四十三年、仙台第一高校卒業。大正二年、東大文学部哲学科（倫理学専攻）卒業。

大正八年、愛知県立医学専門学校教授、

大正十年第二高等学校教授、昭和二年、京城大学教授

昭和四、五年、ドイツ国留学。十五年、広島文理大学教授、昭和二十八年三月退官。広島大学名誉教授、文学博士。

あとがき

年頭、英歴史家のトインピーが「産業革命以来、科学技術は発達し、生産は増大し、経済は成長したが、それによる人と物のうける害毒は無視してきた。又核兵器の発達は大戦争を抑止しているが、世界的な内戦が到るところに繰返され、ストライキや順法闘争などの手段で電気、ガス交通等の生活をたちまち停止せしめるようになり、政治的権力も制止しかねている。こうした闘争が労働者と学生が共力して進められ、現在の生活様式を破壊したとすれば、核戦争と同じく人類を一掃するであろう。こうした否定が転じて、先祖から受け継いだ精神的宝物を全分に發揮すべき時である。そして肯定的方向に進みより住みよい世界をもたらさねばならぬ云々」と、大体こんな警告をしている。

私は敗戦の日、友人と誓った言葉は「教育方面に生涯をかける」と友人は云い「聖徳太子の仏法精神と親鸞聖人の真実教を我ひと共に身にうけ続けたい」と私は答えたが、その友はすでに逝き、私は細々ながらその道一筋を辿っている。時代は移り、政体は變るから、夏には夏の着物、春には春の着物も必要であるが、素裸の人体は何時も變っていない。この素裸の人間から自然に湧き出る数、そのいのちの泉を忘れては人間は枯渇するであろう。

私は近年あまりにも多くの青年や有為の人の自殺にあつた。その原因はいかようあれ、明治の中期に、西洋文化の流入で、文明開化の美名のもとに混乱しきった頃、藤村操青年が「ホーリーインショウの哲学何するものぞ、曰く、人生不可解」と遺書して華厳の滝に身を投じたことを思い浮べる。保守政治家は多数をたのんでアグラをかき、生産者は経済成長に醉い、大衆は闘争をたのみ、内向的な人々は絶望と自殺に追い込まれている。こうした現状にふれるにつけて衆生かわいや生死の海に己が罪から浮き沈み

久遠のかた子故の廻向わたし一人をかた思い、と詠じられた池山先生の悲心を思う。そしてまた、御晩年の近角先生の御病中の詩鳴呼、教行信詎、真宗存す

信界建現何ぞ狂奔を要せんや
歎異一篇後昆に伝う

思想險惡何ぞ論ずるに足らん
を掲げて大きなともしひとしている。

御案内

○毎月、第一、二、三日曜、午後一時半。

一道会例会。市電、新郊通り一丁目下車。

東へ三筋目、左入ル、二軒目。

○毎月二十四日、午前午后、昭和区小桜町。教西寺法話会。市電、御器所通り下車。

市バス、北山通り下車、東入ル。

定価 半年 二百五十円(送共)
一年 五百円(送共)

名古屋市南区駄上町二ノ八八

編集・発行人 花田正夫

電話八二一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印 刷 人 吉野 稔志郎

名古屋市南区駄上町二ノ八八

發 行 所 慈 光 社

振替口座 名古屋一〇四七〇番

郵便番号 四五七